2022 年度 スポーツ評価型選抜（前期） 小論文問題

次の文章を読み、問いに答えなさい。

新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、東京パラリンピックが開幕した。「共生社会の実現」という大会の理念を考える 13 日間にしたい。

大会には、約 160 の国・地域から史上最多となる約 4400 人の選手が参加し、9 月 5 日まで 22 競技 539 種目で熱戦を繰り広げる。新型コロナの影響で、南太平洋のサモアやトンガなどが参加を見合わせた。

どの選手も、この舞台に立つため、厳しい練習を重ねてきた。やむを得ない事情とはいえ、参加できない選手は残念だろう。

日本選手は、全競技に最多の約 250 人が出場する。日本選手団の旗手には、トライアスロンの谷真海選手らが選ばれた。

谷選手は、病気で右足の切断を余儀なくされながらも、「スポーツの力」で乗り越えてきた。2013 年の大会招致の際は、その経験を語り、東京開催を呼び込んだ立役者の一人だ。

パラリンピックの選手たちは皆、幾多の困難や挫折を味わってきている。選手たちのひたむきな姿に学ぶべき点は多いはずだ。

今大会は、全会場が無観客となったが、NHK に加え、民放も初めて一部の競技を生中継する。能力の限界に挑むパラアスリートたちに大きな声援を送りたい。

一方、児童生徒に観戦の機会を与える「学校連携観戦プログラム」は、感染への懸念から反対意見も根強い。選手の活躍を間近で見せる意義は大きいが、子供の感染者は増えている。

状況によっては、教室でのテレビ観戦に切り替えるなどの柔軟な対応も必要だろう。

大会中は、1 万人以上の選手・関係者が来日する。パラリンピックを無事開催できてこそ、五輪を含む東京大会の成功と言える。

選手村や競技会場を外部と遮断し、感染を防ぐ対策を一段と徹底することが重要だ。屋外で開催される競技もあり、暑さへの備えにも万全を期さねばならない。

東京は、1964 年大会に続き、夏のパラリンピックを 2 度開催する初めての都市になる。その間、世界の競技人口は大きく増え、レベルも向上した。

パラリンピックは、障害者のリハビリの延長として始まった。競技用の車いすなどを開発する技術は、高齢者らが日常生活で使う用具の改良にも役立ってきた。

今大会が、障害の有無や性別、国籍などにかかわらず、すべての人が尊重し合える社会への一歩になってほしい。

出典：「共生社会考える契機にしよう」『読売新聞』2021 年 8 月 25 日　朝刊

問1　この文章の中で自分が大事だと思うポイントを 5 つ挙げ、それぞれについて要約しなさい。（各 60 字以内）

問 2　あなたはスポーツ競技者として、「共生社会」の実現に向けてどのような貢献ができるか、また取り組みが考えられるか、具体的事例を挙げながら述べなさい。（600 字以内）

以　上